

一八八四年十月十九日(日)

シンティのブラフマ協会再訪——ヴィジャイ・クリシュナ他、ブラフマ協会の会員たちへの教え——飲びのひととき

聖ラーマクリシュナの三昧境

ブラフマ協会の会員たちはシンティのブラフマ協会に集まっていた。カーリープーリ供養祭プーリの翌日、カルティク月ついで一日、一八八四年十月十九日。これは秋期大祭である。ベニー・マーダヴァ・パル氏のすばらしい別荘が、また協会の式場にあてられていた。朝の祈り、その他の行事が皆執り行われた。大聖大覚者シムリシムリハラマハンサデシフ様は夕方四時半ころ到着なさった。その方の馬車が庭に入ってきて停まった。すぐ会員たちがかけよってタクトールを取り囲んだ。入り口の部屋に協会の祭壇が設けてある。その向かい側に大広間がある。その広間ホールにタクトールはお入りになって席につかれた。たちまち信者が取り囲むようにして坐った。ヴィジャイ、トライローキヤはじめ、大勢の協会員が出席している。そのなかに、以前、協会員であった一人の副判事も来ている。

建物は大祭のために、色彩豊かな飾り付けで輝くように美しかった。そこここに様々の色の旗、の

ほりが立っていた。建物のあちこち、また窓枠にも木の枝が飾り付けられて目にも美しく、全体が木のように見えていた。馴染みのある正面の大池の透明な水には、深い青色の秋の空が映っている。庭園の赤い小道の両側には、実のなっている木や花の咲く灌木の繁みがある。今日また、タクルの聖なるお口から発せられるあのヴェーダの響きを、人々は聞くことが出来るのだ。——その響きは尊い聖仙たちの口から、むかしヴェーダの時代に発せられたのと同じもので、また再び、人間の姿をとった大聖者——ブラフマンの意識に満ちた御方——人間の悲喜に同情し、信者たちを深く愛して、信仰者として化身して、ハリの愛に泥酔した方から聞くことができるのである。イエスの口から、あの文盲の漁夫たちや彼の十二弟子に聞かせたであろう響きであり、また聖なる土地クルクシエートラで、至聖クリシュナの口から、バガヴァッド・ギーターの時代に発せられた響きであり、馭者の姿をとったサツチダーナンダなる至聖クリシュナの言葉を、謙虚で誠実なクンティの息子グダケーシャ（アルジュナ）が甘露の法雨として飲んだ、あの響きである。（訳註、グダケーシャ——眠り《無知》を克服した者の意味でアルジュナを指す）

全智全能なる大宇宙の支配者 最も古く最小のものより微細な万有の維持者

物質界を超えて千万の太陽の如く輝く 難思絶妙なる一の人格神として至上者を冥想せよ

ヨーガの行力と不動の信念により 臨終のとき生氣を眉間に集中し

満心の思慕をもって至上者を憶念すれば 必ずわたしのもとに来ることができる

ヴェーダを学んだ人びとが、不死の世界とよんでいる処について説明しよう

偉大な哲人 賢者たちはここに、入るために、きびしい禁欲の修行をする

—— バガヴァッド・ギーター 8・9〜11 ——

タクール、聖ラーマクリシュナは座にお着きになり、美しく飾られた祭壇を見上げてすぐおじぎをなさった。この祭壇からは至聖かみの話がなされる。だから、タクールは祭壇のあるところは神聖な場所であるとしておられる。不滅の言葉が語られるところは、まさしく聖地であるとされている。裁判所を見れば訴訟のことが思い出され、また裁判官のことが思い出されるように、この神事の場を見て、タクールは至聖かみの思いで満たされたのである。

トライローキヤ氏が歌をうたっている。聖ラーマクリシュナは、「えーと、あれ、あの歌、お前のあの何とも言えない歌、マーよ、私を狂わせておくれ——あの歌をうたつてくれないか」

彼はそれを歌った——

おお、マーよ

私を狂わせておくれ

智慧も分別も用はない

あなたの愛の酒で酔わせておくれ  
マーよ、信者の心を盗むお方よ  
あなたの愛の海に沈めておくれ

この世はあなたの気狂い病院  
笑う人あり 泣く人もあり  
喜びに我を忘れて踊る人もある

イエスもモーゼもチャイタニヤも  
マーよ、愛の悦びに酔いしれた  
この恵まれた仲間に入れておくれ

天国に仲間が集まり うれしい狂気の祭  
互いに師になり弟子になる  
誰にもこんな愛の遊戯あそびはわからない

マーよ、愛に狂ったお方よ

この貧しい私、愛の僕を

あなたの愛の宝で満たしておくれ

歌を聞いている間に聖ラーマクリシユナの様子が変わった。完全な三昧にお入りになった。すべての原理——二十四の宇宙存在原理——大さえをも超えた真理を、ご自分の内にご覧になったのである。運動器官も、知覚器官も、心、知性、自意識、すべてが拭いさられたようにみえる。絵のなかの人形のようにある。

かつて、バーンダヴァの主である至聖クリシユナのこうした状態を見て、ユデイスティラをはじめクリシユナに魂を捧げていたバーンダヴァ達は皆泣いた。まさにその時、アリア民族の誇りであるビーシユマ様が矢の床で最期の時を迎える前に、神(クリシユナ)に意識を集中していたのだった。クルクシエートラでの戦争が終ったばかりで、誰もが思わずビーシユマ様の最期に涙を流さずにはいられない、そんな日だったのである。バーンダヴァ達はクリシユナが三昧に入っていたのがわからず、クリシユナが肉体を捨てたものだと思つて泣いたのだった。(訳註——ビーシユマが最期の時を迎える前にクリシユナに意識を集中した時、クリシユナはビーシユマの専心をヨーガの力で知り、三昧の状態になって彼の肉体に入り、神聖な智識を伝えた。——マハーバーラタ 第十二巻——)

### 神の話——ブラフマ協会は無形の神の信者

しばらくすると、タクール、聖ラーマクリシュナはやや平常に戻られ、法悦に酔った状態でブラフマ協会員たちに教訓をお与えになる。この神的状态は非常に深く、タクールの話し方はまるで酔っぱらいのようだった。その神的状态はだんだん減少して、やがて、ごく普通の状態になられた。

〔わたしはシッデイを食べる——ギターと八大神通力——神をつかむとは?〕

聖ラーマクリシュナ「(恍惚とした様子で)——大実母、カーラナーナンダ(神聖な酪酊)はいらない。シッデイを食べよう。

シッデイとは本質をつかむこと。八大神通力のシッデイではないんだよ。あのシッデイのことは、クリシュナがアルジュナにこう言いなすつただろう——『弟よ、もし八大神通力の一つでも持っていたら、その人はわたし(神)のところには来られない』と。どうしてかといえ、神通力など持つていると高慢になって、高慢の気が少しでもあれば至聖をさとることができないからだ。

それから、ブラヴァルタカ(初心者)、サーダカ(修行者)、シッタ(成就者)、シッタのシッタ(完成者)というのがある。神様を拝みはじめたばかりの人はブラヴァルタカの段階だ。この段階の人は額に宗派のしるし(ティラク)をつけたり、首に数珠をかけたり、外側のことを熱心に実行する。サーダカはずっと進んで、外見上のことにはあまり気を使わなくなる。サーダカは神をさとることに慣れて、心の底からあの御方を呼び求め、称名をし、真剣に祈っている。じゃあ、シッタは? 神は実在し、神だけがすべてのことをなさるのだ、という確信をもった人。つまり、神を見た人のことだ。シッタのシッ

ダは？ あの御方と話をする人だ！ ただ見ただけじゃなく、親として、子として、友だちとして、愛人として、あの御方と親しく付き合ひ、話し合うんだ。

木の中に火が含まれている、という信念。一方、木から火を取りだして米を炊いて食べ、満足し安心する。この二つは別の品物だ。

「靈的境界に限界はない。その上があり、またその上がある」

「俗人の考えている神——情熱と得神——しっかり持て」

「(恍惚とした様子で) ここにいるのはブラフマン智を求めている人たちだ。無形の神の信者だ。それも結構だね。

(ブラフマ協会の協会員たちに向かって) 一つの理想かんえんをしっかりと持っている——形ある神でも、無形の神でも。そうすれば、いずれ神をつかむことができる。そうしないとダメだ。しっかりと信仰していれば、形ある神の信者も神をつかめるし、無形の神の信者もつかめる。砂糖のついたお菓子を正面からかじっても、横っちょからかじっても、甘いことは同じさ(一同笑う)。

でも、しっかりと信念を持たなけりやだめだよ。熱心にあの御方を呼ばなけりやダメ。世間の人たちが考えている神はどんなものか知ってるかい？ 叔母さん連中の口ゲンカをいつも聞いている子供たちが何かして遊んでいるとき、『神さまに誓って！』などと言う、あの程度のもんだ。それから、キザな紳士がキンマの葉(インドの嗜好品)を噛み噛み、ステッキを手にもって庭を散歩しながら、花を

一つ摘みとって友だちに言う——『ねえ君、神は何というビューティフルな花をお造りになったものだろう！』こんな程度のもので。でも、こうした俗人の気分はホンの一瞬の間のことだ、ちようど焼けたフライパンの上の水滴みずたまのようなものだ。（訳註——タクールは時々会話の中で、聞き知った英語の単語を使っておられた）

一つの理想かえがえをしつかり守って修行することだ。飛び込むんだよ。そうしなければ海の底にある宝玉たからは手に入らない。水の表面でバシャバシャやっているだけでは何もつかめないよ」

こうおっしゃってタクールは、かつてケーシャブのような信者たちの心を魅了したあの歌を、あの甘いやさしい声でお歌いになった。一同はみな、まるで天国かヴァイクンタ（ヴィシュヌ神の浄土）に坐っているような気分になった。

沈め 沈め 沈め

美しき海に わが心よ

深き底にゆきて探せば

聖愛あいにたまの宝玉 きみを待つなり

探せ 探せ 探せ

さがせ 汝なが胸の神のふるさと（プリンダーヴァン）



ともせ　ともせ　ともせ  
智慧の灯を　常に明るく

すたん　すたん　すたん

誰がつくのか　米つき棒は

きけ　きけ　きけ　とカビールは言う

師グルの御足を想い　慕えと

### ブラフマ协会会员と共に——ブラフマ協会と神の栄光を並べ立てること

聖ラーマクリシュナ「深く沈め。神を愛することを学べ。神の愛に浸れ。お前たちの祈りの言葉を聞いたがね、お前たちの協会じゃ、神様の偉いことをやたらに言い立てるが、ありやどいうつもりだい？——『おお神よ、あなたは大空をお創りになりました。広い広い大海をお創りになりました。月の世界、太陽の世界、星の世界をお創りになりました』ああいうことを言つて、それほど役に立つものかねえ？

人はみな、旦那の別荘を見てびつくりする——木も花も池も部屋も、部屋の中の絵や何かも、何とすばらしいものかと思つて言葉も出ないほど感心する。でも何人が、別荘をつくつた旦那を探そうと

するかね？ 旦那を探すのは一人か二人だ。神様を熱心に探せばその御方に会えるし、話も出来るんだよ——ちよūdわたくしがお前たちと話をするようにね。ほんとだよ、ほんとに会えるんだよ！  
こう言つても——さあ、信じる人がいるかなあ！」

〔聖典では会得できない——The Law of Revelation (天啓の法則)〕

「お経の中で神様を得られるかい？ お経や聖典を読めば、せいぜいのところ、神は存在するらしいなあと感じる程度だろう。自分で飛び込まなければ神様は会つて下さらないよ。深く飛び込んだ後で、あの御方は自分のことを知らせて下さるから、そこでいろんな疑いは晴れるんだ。本を何千冊読んでも、口で何千回聖句スローカをと覚えても、情熱をかたむけてあの御方に飛び込まないかぎり、あの御方をつかむことは出来ないんだよ。ただの学問だけでは人をだますことは出来ても、神をだますことは出来ない。

お経、書物ほん、ただそれだけで何になる？ あの御方のお恵みなしには何一つどうにもなりやしない。だから、あの御方のお慈悲がいただけるように、一生懸命に努力することだ。お慈悲がいただけたら、あの御方に会えるんだから。お前たちと話をして下さるんだから——」

〔ブラフマ協会と平等——神は不公平か？〕

副判事「先生、神の恵みは、ある人には多く、ある人には少なく与えられるのでしょうか？ とす

れば、神は不公平だと言わなければなりません」

聖ラーマクリシュナ「何だって！ 同じタラの語がつけば、ゴラタ(馬)もサラタ(土器)も同じだと言うのかい？　すべてに神は表れているけれど、表れている力には違いがある。お前の言ったようなことを、イーシュワラ・ヴィディヤサーガルも言っていた。こうだ——『先生、あの御方はある者には大きな力を与え、ある者には少ししか力を与えて下さらないのですか？』わたしは答えたよ——『遍在する神として、あらゆるものの中にあの御方はいなさる。このわたしの中にいなさるのと同じように、蟻ンコの中にもいなさるよ。だが、力のあらわれ方がそれぞれに異う。もし、どの人も同じなら、ヴィディヤサーガルの評判を聞いて、わたしらがワザワザ会いに来たのはどういうわけだい？　お前さんに角が二本生えているから、それを見に来たとしても言うのかね？　ちがうだろう。お前さんは大慈善家だ、大学者だ。そういう徳を他人より沢山もっているから、お前さんはこんなに皆に尊敬されているんだ。片手で百人を負かすことのできる人がいるってことを知らないか。そうかと思えば、ろくに会いもしないうちから、たった一人の相手と戦うことさえ恐れて逃げだしてしまうような人もある」

もし、力が異ったあらわれ方をしないなら、大勢の人がケーシャブ・センをあんなに尊敬したのは、どういうワケだろう？

ギター(訳註)にあるがね、大勢の人に尊敬される人——学問知識が秀れているとか、歌や楽器の演奏がうまいとか、講演や講義が人をひきつけるとか、何が原因でもいいが——その人には必ず神の特別な

力が与えられている、と——」

一人の協会員「(副判事に向かつて) この方のおっしゃることを信じなさい！」

聖ラーマクリシュナ「(その協会員に) お前は何て人間だ！ まだ、ほんとに信じられないうちに無理に信じろなんて！ 偽善だよ！ お前はペテン師だよ！」

その協会員は何ともはや恥じ入って、困惑の極みに達した。

ブラフマ協会——ケーシャブと在家生活における無執着——世間から離れること

〔以前の話——ケーシャブへの教え——静処で独り修行すること——智慧のしるし〕

副判事「先生、やはり、世間はいずれ捨てなければなりませんか？」

聖ラーマクリシュナ「いやいや、お前たちが何故、世間を捨てなけりやならんのだい？ 世の中に住んでいたって神は知れるよ。でも先ず何日か独りで静かなところへ行つて住まなけりやならない。そこで神様に対する修行をするんだ。家の近くに一部屋もつようにして、そこから食事のときなんかにとどき家に戻るようになればいい。ケーシャブ・センやブラタブたちは、『先生、私どもは、ジャナカ王のようになろうと思えます』と言っていた。わたしはこう言つて聞かせたよ——『口でそう言っ

〔訳註1〕 栄光に輝くもの 壮麗なものの 偉大なもの 善美なものはすべて

わたしの光輝より発した閃光の 一つにすぎないということを知れ——ギーター 10・41——

たからって、ジャナカ王のようにはなれない。ジャナカ王は先ずひとりで、さかだち逆立やそのほか、どんなに沢山の苦行をしたことか！ あんたたちも何かしなさい。そうすりゃジャナカ王のようにもなれるだろう』スラスラ英語を書ける人も、最初からいっぺんに書けるようになったわけじゃないだろ？ 貧乏な家の息子で、はじめの頃はどこかの家の料理人をしてやっそこ食べていたかもしれん。そして、苦勞しながら勉強したおかげで、今は英語もスラスラ書けるようになったというわけだ。

ケーシヤブにもこう言ったよ——『独りにならなけりゃ、どうして重い病気が治せるかね？』と。病気で熱に浮かされているんだ。そのチフス患者のいる部屋に、タマリンドの漬物と水がめが置いてあつたらどうなる！ 病気が治ると思うかい？ タマリンドの漬物——ごらん、言っているうちにも、わたしの口にはツバがわく（一同笑う）。目の前にあつたらどうなるか、誰だつてわかることだろう？ 若い女は、男にとつてタマリンドの漬物だ。うまい物を食べたいという欲望は、水がめだ。世俗的なものに対する欲望にはキリがないのに、それが病人の部屋にあるんだからね！ これでチフス患者が全快するわけはないだろ？ 何日か別な場所に隔離して、そこには漬物も水がめも置いておかない。そうやって病気が治れば、元のところに戻つてももう心配はない。あの御方をつかんでから世の中に<sup>と</sup>出て住めば、もう女と金は恐れるに足らぬ。そうなればジャナカ王のように無執着の生活ができるんだよ。だがとにかく、はじめの段階ではうんと気をつけなけりゃいけない。嚴重に独りになって修行することが必要なだよ。菩提樹アスワツタも若いうちには四方ぐるりに柵を作つてやるだろう——牛や山羊に食べられないようにね。でも幹が太くなれば柵はいらなくなる。象をつないでも樹はビクともしない。一人静

かなところで修行して、神様の蓮華の御足に信仰が持ててから家に帰って世間の仕事をすれば、女と金はお前に何の害も及ぼさないだろうよ。

静かなところで牛乳を凝こらせてバターをとる。智慧と信仰というバターを心という牛乳からとり出したら——そういう形になった心なら、世間という水の上に放り出しても溶けず混まりず平気で浮かんでいる。だが、心が未熟なままでは——牛乳のまま世間の水に入れたら、牛乳は水にまぎってしまふ。それでは、心が無執着で浮いていることは出来ない。

神を覚さるためには、世間で暮らしても片手で神様の蓮華の御足をシツカリつかんでいて、もう片方の手で仕事をする事だ。休暇がとれたら、二本の手で神様の蓮華の御足をつかむ——つまり、静かなところに独りで行って、ただひたすら神様のことを考え、神様に仕えていることだ」

副判事「(嬉しそくに) 先生、実に美しいお話です！ 一人静かなところで修行することが必要なことは勿論もちろんでございます！ しかし、私共はそのことを忘れているのです。いっぺんにジャナカ王になつたようなつもりになつてしまつて！ (タクルと一同笑う) 『世間を捨てる必要はない、家にも神に触れることができる』——このお言葉をうかがつて、私はすっかり安心して嬉うれしくなりました」

聖ラーマクリシュナ「お前たちがなぜ、この世を捨てなけりやならないのだい？ 戦うときにはと、りでにこもつて戦う方がいいよ。感覚器官と戦い、飢えと渴きとに戦わなけりやならんのだからね。この戦争には、世間に住んでいた方が都合がいい。それに今は末世カリユガで、食物なしには生きられない命だ。もし一日でも食べ物がなければ、神も仏もどこかへふつとんでしまふ。ある人が細君に言つた—

「私は家を捨てて出て行って修行するよ」その細君はなかなかの智慧者だった。「あなた、どうして外をほつつき歩かなけりやなりませんの？ お腹を満たすために、十軒もの家の戸口に立って物乞いをするのですよ。それでもよかつたらお行きなさいまし——。この家一軒で間に合わせた方がよくありませんかしら——」

お前たちが、どうして世間を捨てなけりやならんのかね？ 家にいる方が便利だよ。食事の心配もいらぬいしね。夫婦いっしょに暮らしていたって、ちつとも害はない。体に必要なことはいつでも間に合うわけだ。病気になるっても看病してくれる人がそばにいるし——。

ジャンカ、ヴィヤーサ、ヴァシシユタ——こういう方々は智識を得てから世間で暮らした。この方々は二振りの剣で身を護った。一本は智慧の剣、もう一方は行為の剣」

副判事「先生！ 智識を得たということは、どのようにして知り得ますか？」

聖ラーマクリシユナ「智識を得たら、もうあの御方（神）を遠いものだと思わなくなる。あの御方は、もうあの御方じゃなくなる。もうこの御方になるんだよ！ 胸のなかにあの御方がいるんだ。すべてのもののなかにあの御方はいなさる、探しさえすれば誰にでもわかる」

副判事「先生！ 私は罪人つみびとなのです。私のなかにあの御方が在おほすなど、どうして言えましようか？」

〔ブラフマ協会、キリスト教と罪の教義〕

聖ラーマクリシユナ「そうやって、お前たちはすぐ、罪、罪、と言う！ そりゃ、クリスチャンの

考え方だろうか？ わたしに、ある人が本（バイブル）を一冊くれた。少し読んで聞かせてもらったがね、同じことばっかりくり返しているんだ——それ罪だ、やれ罪だ！ 自分はこの御方の名をとなえている、神の——イーシュワラでもいい、ラーマでもいい、ハリでもいい、神の名をとなえている——だから、自分はどう罪なんかと何の関係もない！ こういう信念を持ってないものかい？ 神の御名の偉大さを信じ切らなけりゃいけないよ」

副判事「先生！ どうしたらその信念がもてるようになるのですか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方に夢中になれ。お前たちの協会の歌にこんな文句があるだろう——『主よ！ 灯明をあげ供物をささぐとも、わがこころの情熱なくては、君を知るよすがもなし』そういう情熱、そういう神への愛が芽生えるようにと、そのために心の底から祈ってみろ。そして泣いてみる。女房が病気だ、金を失くした、やれ仕事はどうした、こんなことで人は瓶一杯も涙を出す、神を求めて泣いている人を見たことがあるかい？」

**神に代理権をわたせ——家庭人の義務はいつまで？**

トライローキヤ「先生、この方々には暇がないのです。イギリス人に使われているのですから——」  
聖ラーマクリシュナ（副判事に向かって）「そうかい。じゃあ、あの御方に代理権を委任しろ。いい人に責任をもってもらえれば、決して悪いようにはしないだろう？ あの御方に一切合切、心の底から任せてしまつて、お前は安心して暮らしゃいい。あの御方が下すつた仕事をしている。」



猫の子には思慮分別の心が無い。母さん任せだ。母猫が台所に置けば、そこで満足している。ミヤーマー鳴いて母さんと呼ぶだけ。母猫が主人のやわらかい寢床の上に置いても同じ気持ちでいる。ただ、ミヤーマー鳴くだけだ」

副判事「私どものように家庭をもっている者は、いつになれば義務を果したことになるのでしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「お前たちの義務はいつまでだった？ 子供たちが成人すること。妻を養って、それから自分がいなくなった後も暮らしていけるような用意をしておくこと。そうしなかつたらお前はひどい人間だ。シユカデーヴァたちはちゃんと思いやりがあつた。思いやりのない奴は人間じゃない」

副判事「子供を養うのは、いつまででしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「一人前になるまでさ。ヒナ鳥が大きくなって自分でエサが拾えるようになると、親鳥は突つき出して自分の傍へよせつけない」(一同笑う)

副判事「妻に対しては、どのような責任があるのでしょうか？」

聖ラーマクリシユナ「お前が生きている間は、貞節な妻であれば、宗教上のことについて教えてやること。食べさせたり着させたりしてやること。もし貞節な妻であればの話だが、未亡人になれば、お前の死後もちゃんと食べていけるような用意をしておいてやること。

けれども、神のことに夢中になって我を忘れてしまえば、もうこの世の義務などというものはなく

なる。そうなれば、明日のことはお前が心配しなくても神様が心配して下さい。そうなれば、お前の家族のことは神様が考えて下さる。地主が未成年の息子を残して死んだときには、後見人がその子の面倒をみる。これは法律で決まってることだ。お前、よく知ってるだろう」

副判事「はい、その通りでございます」

ヴィジャイ・ゴースワミー「アハー！アハー！何というお言葉！あの御方に全く心が集中してしまつた人、あの御方の愛に泥酔している人、そういう人たちの責任は至聖かみ自らが負つて下さるとは！未成年の子供には自然に後見人ができるのですね。ア、いつになつたらそんな境涯になれるだろう！そうなつた人たちは何と幸福だろう！」

トライローキヤ「先生、世間において、ほんとうに智識が得られるのですか？神が得られるのですか？ほんとうですか？」

聖ラーマクリシュナ「アツハツハツハ、アハハハハハ。どうしてそんなに気になる。お前はもう、すっかり神に夢中じゃないか（一同笑う）。神に心を置いて、世間に住んでいればいいんだよ。どうして、世間にいちやさと覚れないんだね？必ず覚れるよ」

〔世間における智者ジニヤニの特徴——神をつかんだ人の特徴——生前解脱者ジウヅアムクタ〕

トライローキヤ「世間において智識を得た人の特徴は、どのようなものでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「ハリの名に涙を流し身が震える。——あの御方のやさしい名前を聞いただけ

で体が震えて肌毛が逆立ち、目から止めどなく涙が流れる、そういう人だ。

世間のことに執着しているかぎり——女と金を愛しているかぎり、肉体意識がなくなるらない。世間への執着が減る分だけ、真我の智識の方に近づいて肉体意識がうすくなる。世間への執着がすつかり消えたら真我アトマジニヤが生まれ、そうなれば、真我と肉体は別だということがはつきり感じられる。ココナツの実のなかの乳汁が乾ききらないうちは、ナイフで殻と中身を別々にするのはむずかしい。水気が乾いてしまえば、コロコロ音がして中身は自然に別になってしまふ。これを乾椰子ココナツと言うがね。

神をつかんだ人の特徴はこうだ。その人はコロ・ココナツのようになってしまふ——つまり、肉体が自分だという知覚がなくなってしまうんだよ。肉体がうける幸不幸は、自分の幸不幸だという感じがしない。その人は肉体の快樂よろこびを欲しがらない。もうその人は生前解脱者ジツツジムクダとして、悠々とこの世を散歩しているんだよ。

カーリーの信者は、即身解脱して永遠の喜びをうける。

神の名を口にしただけで、涙がこぼれて身の毛が逆立つようになつたら、女と金への執着が消えて神をつかんだのだとわかる。マッチが乾いていれば、一本擦すっただけで火がつく。湿っていたら、五十本擦すつてもだめだ。マッチ棒がムダになるだけ——世間のことにドツプリ浸かっていたら——女と金の汁に心が濡れていたら、神を求める高尚な気持ちちは出てこない。千回やつても全くの無駄骨折りだよ。世俗の汁気が乾けば、すぐ火がつく」

〔方法は——一心不乱になること——あの御方は生みの母〕

トライローキヤ「世俗の汁気を乾かすには、どんな方法がございますか？」

聖ラーマクリシュナ「大実母のところに行つて一生懸命のため。あの御方に会えば、俗汁は乾いてしまふさ。女と金への執着もみんな消えていくさ。自分の生みの母親だと思えたら、すぐにできることだ。あの御方は継母でも義母でもないんだよ。自分を生んでくれた正真正銘のおつ母さんだ！ 一生懸命になつておつ母さんにねだれ。子供は母親のサリーの端をつかんで舂を買う銅貨をせがむ。——母さんは、ことによるとよその娘たちを相手に何かおしゃべりしているかも知れない。はじめは、どうしてもくれないかも知れない。『ダメ、お父さんが子供にお金をやつてはいけないとおっしゃつたもの。お父さんが帰つたらお願いしてみましようね。いま舂揚げをしようとロクなことはないよ』なんて言つて。すると子供は泣き出して、どうしてもあつちへ行かない。とうとうかあさんは根負けして娘たちにこう言う——『アラ、ごめんなさい。ちよつとこの子をなだめてきますからね』そして、カギをとりだして、コリツ、コリツと錢箱の錠をあけ、銅貨を一枚子供に投げてやる。お前たちも大実母にねだりなさい。そうすりゃ、あの御方はきつと会つて下さるから——。わたしはシーク教徒の人たちにこの話をしてやつたよ。シーク教の人たちが南神村のカーリー寺に來たときのことだ。大実母カーリーのお堂の真ん前に坐つて話をした。連中が、『神は慈悲深い』と言うから、わたしは質問した——『どうして慈悲深い？』連中——『どうしてつて、先生！ あれの御方はいつも我々の世話をして下さるし、我々に宗教も富も何もかも与えて下さるし、食べ物を与えて養つて下さるのです

よ』わたしは言った——『誰かに子供ができたとする。その子を養う責任はその子の父親にあるのか、それとも、よその町の人に来て養ってくれるのか、どっちだ?』と」

副判事「先生! では、神は慈悲深くはないのですか?」

聖ラーマクリシュナ「どうしてまた、そんなことを? わたしはこういうこと言っただよ。あの御方は大そう頼もしい身内だと! あの御方に、わたしらは強引にねだつてもいいんだよ! 身内にはこんな言い方だつて出来るだろう——『よこせつたら、このボンクラ!』」

## 高慢と副判事

聖ラーマクリシュナ「(副判事に)それはそうと、我執(エゴ)(アハンカーラ)や高慢(フライト)は智識から生じるものか、それとも無智から生じるものか、どっちだと思ふね?

我執はタマス性で、無智から出てくるものなんだよ。この我執というじゃまがあるから、神が見えないのさ。我が死(ワタシ)んだら、悩みはすべてなくなるのさ。我執は無益だ。この体、この富や権力、どれほども続きはしないよ。一人の酔っぱらいがドウルガーの神像を見ていた。お像のいろんな飾りを見てこう言った。『マー、どんなにきれいに飾つても、二日か三日したら、あんたはガンジス河に投げ込まれるんだよ(訳註——ドウルガー祭(プーゼ)のときには、美しく飾つた大きなドウルガー女神の張りボテを作つて祀り、祭が終わるとガンジス河に浸す)』(一同笑う)だから、いつも皆に言うんだ。裁判官サマだろと何サマだろと、みんな二日ばかりの命だと。だから、我執(エゴ)や高慢(フライト)を捨てろと」

「ブラフマ協会と平等——人は生まれつき性格が異う」

「サットヴァ、ラジャス、タマスの三性は異った性質だ。タマス性の人の特徴は我がまま、眠り好き、大食、色情、怒り。ラジャス性の人は多くの仕事に自分をまきこむ。着るもの、履くもの、すべてきれいでキチンとしているし、家は隅から隅まで掃除が行きとどいているし、応接間にはヴィクトリア女王の肖像画がかけてあるし、神様に関係のある行事のときは絹織物の衣装を着て、首にじゅうず菩提樹の数珠をかけ——数珠玉のところどころには純金の玉が入れているんだ。もし誰か知人が参拝にくれば、最初から終わりまでいっしょについて歩いて寺院のことを説明し、『こちらへおいで下さい、まだございますよ。白い石の大理石の床もありますし、精巧な彫刻を施した舞堂ナトマંディルもあります』寄付をするときは、なるたけ人に知られるようにする。サットヴァ性の人はとてもおだやかで落ち着いている。着るものはどんなものでもいい。質素な食べ物で、腹を満たすだけ稼ぐ。人にへつらつてま金を手に入れようとは決してしない。家の手入れもろくにせず、子供の服装の心配もしない。名声や評判なども気にかけないし、神のことを考えたり慈善をしたりする場合も、人知れずこっそりするし、蚊帳カカヤの中で瞑想したりするから、ほかの人はそれと気付かない。あの旦那は夜よく眠れなかったので、朝おそくまで蚊帳カカヤの中で眠っているのだらう、くらいに思っている。サットヴァ性はハシゴの最後の段だ。そのすぐ上が屋根。サットヴァ性が出てきたら、神をつかむのはそう遠くない。——もうちよつと進めば、あの御方のところだ。

(副判事に向かつて) お前は、人は皆同じだと言ったね。ごらん、それぞれが生まれつき大そう異つた性質をもっているんだよ!

それに、まだ他にもいろいろな種類があるんだよ。永遠の魂、解脱した魂、解脱しようと努力している魂、縛られた魂——というふうには、この世にいる人にはいろいろな段階があるんだ。ナーラダやシユカデーヴァのような方々は、永遠の魂で、たとえてみれば大きな汽船のようなものさ。自分もむろん向こう岸へ渡るが、そのほか大勢の人や動物、象までも乗せて渡れる。永遠の魂は管財人と同じで、一つの土地財産を始末すると、また別のものを整理しに行く。それから、解脱しようと努力している魂があつて、彼らは世間の網から逃れ出ようとして命がけで努力している。その中で一人か二人が首尾よく脱け出せるのだが、それが解脱した魂だ。永遠の魂は利口な魚のようなもので、最初から決して網にかからない。

しかし、縛られた魂——世間一般の普通の人——あの連中は正気じゃないんだよ。網にかかつて身動きが出来ないほどなのに、まるでそれに気が付かないのさ。神の話をしている場所にでくわすと、すぐ立ち去つて行く。神の名なんぞ死ぬときだけでたくさんだ、と言ってね。じゃ、その死ぬときはどうだ? 死の床に横たわつて女房や息子たちにこんなことを言っている——『どうしてランプに何本も芯を入れとくんのだ? 一本でたくさんだよ。油が無駄になるじゃないか』そして、女房や子供たちのことを思つて泣く——『ハエー! おれが死んだら、これたちはどうなるんだらう!』それから、縛られた魂は悲しい苦しい経験しやうこを性懲りもなく繰り返す。ラクダはトゲ草を食べて口からダラダラ血

を流しているのに、それでもトゲ草を食べつづけるが、あんなようなものだ。子供が死んで悲嘆にくれていたのに、また毎年のように子供をつくる。娘の結婚のために破産するほどの目にあっても、また毎年のように子供をつくる。そして言うことがこうだ——『だって仕様がなんでしょう。こういう運命なんですから！』

聖地参詣に行っても、自分では神に想いをはせるヒマなどないんだよ。女房の荷物をかついで今にもへたばりそうになって、お寺へ行けば行ったで、子供に聖足水チヤラチムリクを飲ませたり、神様にお辞儀ブラナームをさせたりで大忙しだ。縛られた魂は、自分と家族の胃袋に仕える奴隷だ。おまけにウソをついたり、人を裏切ったり、ペコペコお世辞をつかったりしてまで金銭ゼもうけをしようとする。神のことを考えたり神を瞑想することに熱中している人たちを見ると、縛られた魂どもは、『あれは気狂いだ』などと言ってあざけり笑う。

(副判事に向かつて) ほら、人間はこんなにそれぞれ異ちがっているんだよ。お前はみんな同じだと言っただけども、生まれつき、こんなに異ちがっているんだ！ たくさん力をもった人もいるし、少ししかもたない人もいるし——」

〔縛られた人は死ぬ時にも神の名を称よえない〕

「この世に執着した縛られた人々は、死ぬときにもこの世のことしか話さない。うわべだけ数珠を繰くって称名したり、ガンジス河で沐浴したり、聖地巡拝に行ったりしたって一体何になる？ 世間



への執着が心の中に巣くつているから、死ぬときだつてそれが表に出るんだ。無意味な、阿呆みたいなことを口走る。ウワ言にも、『ウコンの粉、七色トウガラシ、月桂樹の葉!』なんて叫ぶんだよ! オウムは何でもないときは人間の口真似をして、ラーダー・クリシュナ、ラーダー・クリシュナなんてさえずつているが、猫に捕まったときは本来の声を出して、キヤーア、キヤーアと鳴く。ギーターには、『人は死ぬとき心で思ったものに次の世でなる』(訳註)と書いてある。パーラタ王は『鹿、鹿』と思つて捨身したので次の世には鹿に生まれた。神様のことを考えながら死ねば、必ず神様のところへ行ける。もう二度とこの世に戻つてくる必要はないんだ』(訳註——パーラタ王の『鹿』の話は、一八八四年十月二日を参照のこと)

一協会員「先生、ほかのときには神のことを考えていたのに、あいにく死ぬときに考えなかつた、という場合は、またこの幸と不幸が錯綜さくそうしたこの世に戻つて来なくてはなりませんか? 以前にはたしかに神のことを思つておりましたも?」

聖ラーマクリシュナ「人は神のことを考えるが、神を信じないからまた忘れてしまふんだ。世間に執着しているんだよ。象の体を洗つてやつても、またすぐホコリや泥にまみれてしまふが、それと同じだ。心は狂える象のごとし! だから、象を行水させて小屋の中に入れてしまえば、もうホコリや泥にまみれないでもすむ。もし人が死ぬとき神を思つていれば、心が清まつて、もうその人の心は女と金に執着する機会がなくなる。

神を信じないから、こんないろいろな沢山の悩みや苦しみがあるんだよ。ガンジス河で沐浴してい

るときは、罪は本人から離れて岸辺の樹の上にとまってるそうじゃないか。沐浴を終えてお前が岸に上がってくるや否や、罪の鳥はお前の肩に舞い戻ってきて、そのまま居坐るんだよ（一同笑う）。捨身（死）のときに神を思っでいられるように、前もって準備をしておかなければいけない。その方法は——訓練のヨーガだ。神を想うことを繰り返し繰り返し訓練しておけば、最後の日にもあの御方のことを思い出せるよ」

一協会員「いいお言葉です。まことに美しいお言葉です」

聖ラーマクリシュナ「いや、チグハグなことを言ってしまったね！ でも、わたしの気持ちはわかるだろう？ わたしはただの道具で、あの御方が使い手さ。わたしは部屋で、あの御方が住み手なのさ。わたしは機械で、あの御方がエンジニア。わたしは馬車で、あの御方が馭者。行かせる通りにわたしは行く。させる通りにしているだけのことさ」

### 聖ラーマクリシュナ、キールタンの喜び

トライローキヤがまた歌をうたっている——長太鼓とカルタル（小さいシンバル）の伴奏だ。聖ラーマクリシュナは神の歌に狂ったように踊っておられる。踊りながら、何度も三昧に入られる。入三昧の

（訳註2）誰でも肉体を脱ぎ捨てるとき、心で憶念している状態に必ず移るのだ

クンティの息子よ、これが自然の法則、常に思っていることが死時に心に浮かぶ——ギーター8・6——

姿で立つておられる。不動の体、まばたきもせぬ目、輝くような笑顔。愛する信者の肩に手をおいていらつしやる。そしてまた、再び抑えきれぬ情熱に狂った象のように踊りはじめられた。意識がすこし戻ると、即興の歌をおうたになつた――

踊ろよ、マー、何千何万と

数えきれぬ信者の間をめぐって

あなたも踊って、さあ踊って

みんなを踊らせておくれよ、マー

わたしの胸の蓮華のなかで

マーよ、踊っておくれよね

さあ踊っておくれ、ブラフママイー(マーの別名)

世にも麗うるはしい そのお姿で

それは、未だかつて見たことも聞いたこともない光景である！ 真理なる母に合一し、愛に酔いしれたその神々しい幼な子の踊り！ ブラフマ協会の会員たちはその方を囲かこんで、自分たちも踊っている。磁石に引かれる鉄のようだった。皆、狂ったようにブラフマンの名をとなえている。そしてまた、

ブラフマンのもうひとつの甘美な名——大実母<sup>マ</sup>の名をと名づけている。みんな子供のようになり、マー、マーと呼びながら泣いている。

キールタンが終わると一同は席についた。まだ協会の夕拝式は始まっていない。突然わき起こったキールタンの喜びに、形式的な礼拝のことを皆は忘れてしまったのだ！ ヴィジヤイ・クリシュナ・ゴースワミーが夕拝の壇に上がる段取りになっていた。夜の八時頃である。

皆、席についていた。聖ラーマクリシュナも坐っていらつしやる。タクルルの正面にヴィジヤイが坐っている。ヴィジヤイの義母はじめ、大勢の婦人信者たちが、タクルルにお目にかかつてお話したいと使いのものをよこしたので、タクルルは少しの間、奥の部屋に行かれて彼女たちと話をなさった。

間もなく戻ってこられて、ヴィジヤイにこうおっしゃった。「なあ、お前のお義母<sup>かあ</sup>さんの信仰は、まったく素晴らしいよ！『世間のことについては、もう何もおっしゃらないで下さい。一つの波が消えると、また別な波が起こるのでございます！』と言ったよ。わたしは、『おう、そうだとも、でも、それがあなたにとつて何だい！ あなたはちゃんと智識を得ているんだからね！』と答えた。するとこうだ。『まだ、明知<sup>ウヂヤイ</sup>のマーヤーと、無知<sup>アウヂヤイ</sup>無明<sup>アウヂヤイ</sup>のマーヤーを超越するところまで行っておりません。無知のマーヤーを超えただけではまだダメで、明知のマーヤーも超えてはじめて智識を得たことになるでしょう。あなた様がそうおっしゃいました』」

この話をしてるところへベニー・バル氏が入ってきた。

ベニー・バル「(ヴィジヤイに向かつて) 先生、ではどうぞ。たいへん遅くなりましたが、どうぞ夕拝を始めて下さい」

ヴィジヤイ「(バルに) 先生、今さら夕拝など必要ありませんよ。あなた方、ここでは先にパヤス(乳粥)を出して、そのあとで豆スープや何かを出すのですか」(訳註——ふつうパヤスはデザートとして最後に出される)

聖ラーマクリシュナ「(につこりして) 信者はそれぞれの気質に応じたものを供物にするんだよ。サツトヴァ性の信者はパヤス(乳粥)のようなもの、ラジャス性の信者はいろんなごちそうを五十皿もつくって供える。タマス性の信者は山羊やそのほかの動物を犠牲壇に供える」

ヴィジヤイは、壇上上がるかどうかどうしようかと迷っている。

## ヴィジヤイへの教え

〔ブラフマ協会の講演——教師の仕事——神のみがクル〕

ヴィジヤイ「あなた様が許可を下さるなら、私は壇が上がって話をいたします」

聖ラーマクリシュナ「自惚れた<sup>うぬぼ</sup>気持ちがなくならないんだよ。『私がレクチャーしてやるから、お前たちはよく聞け』というような自惚れの<sup>うぬぼ</sup>気持ちがあればいいんだ。我執<sup>エゴ</sup>(アハンカール)は智識から出るか、それとも無智からかい？ 我執のない謙虚な人だけが智識を得るんだよ。水は低いところにたまるが、高いところからは流れ落ちてしまう。

我執があるうちは、智識は身につかない。むろん、解脱もできない。この世に繰り返し繰り返し生まれ続けてこなければならぬ。牛はハムバー、ハムバー（私、私）と啼くから、あんなに苦勞するんだよ。さんざ働かされたあげく、屠殺人に切り殺されて、皮は靴にされる。また太鼓に張られて、遠慮会釈なく打たれて苦しみの終わるときがない！最後に筋が皮ひもにつくられて、それが綿すき機の部品になる。綿をすくとき、その皮ひもは、トゥフ、トゥフ（あなた、あなた）と音をたてる。そこでやっと楽になるのさ。もうハムバー、ハムバー（私、私）とは言わない。トゥフ、トゥフ（あなた、あなた）——つまり、おお、神様、あなたがカルター（行為者）で、私はアカルター（受動者）。あなたが使い手、私はただの道具。あなたがすべてのすべて——」

〔タクール、聖ラーマクリシュナとグルという言葉〕

「師、父、それから主人。この三つの言葉はわたしの体にトゲのように突き刺さる。わたしはあの御方の子供、永遠の子供なのに、どうして父なんだい？ 神様が主人で、わたしは主人の意のままに動く。あの御方が使い手で、わたしはただの道具にすぎない。」

もし誰かが、わたしのことを師なんて呼んだら、わたしはこう言ってみようよ——『あっちへ行け、この間抜けめ。わたしがどうして師なんだ？』サッチダーナンダ（梵の本質）だけが師で、そのほかには師はない。あの御方に頼りきるよりほかに方法はないんだ。あの御方ひとり、この世の海を渡して下さる舵取りだ」

(ヴィジヤイに向かつて) 宗教上の教師として行動するのは、大そう難しいことだよ。それをすると自分にとつては害になる。十人も人が自分を敬っているのを見ると、自然と足を組んでそっくり返り、『さあ、私が話すことをよく聴いていなさい』などと言いたくなる。こういう態度は実に悪いね。ちよつとばかり有名になると、もうそれまで！ 人はせいぜいのところ、これ位のこととは言うさ——『まあ、ヴィジヤイ先生は上手に話をなさる。あの人は大そうな知識人だねえ』

私が話している」という気持ちを持つな。わたしはいつも大実母に言うよ——『大実母、あんたが使い手、わたしは道具。させる通りにわたしはするよ、言わせる通りにわたしは言うよ』と」

ヴィジヤイ「(恭々しく) あなた様が行けとおっしゃれば、わたくしは壇に上がります」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハ、アハハハハ。どうしてわたしが、そんなことを言うのかね。月の叔父さんは、誰にとつても月の叔父さんだ。お前が自分であの御方に言いなさい。まじめに誠実にやつていれば、何の心配もない」(訳註、月の叔父さん——ベンガル地方では母親の兄弟は甥や姪をとても可愛がり優しくて甘えられる存在で甥や姪に対して影響力が強い。月も人に対して優しくて影響力も強いので、母親方の叔父さんは月に響えられる)

ヴィジヤイが重ねてお願いとすると、聖ラーマクリシュナはおっしゃった——「行きなさい。そして規定通りにやんなさい。心の底からあの御方を信仰していれば、それで充分だ」

ヴィジヤイは壇上に坐り、ブラフマ協会の式次規定に従つて礼拝式を司つた。ヴィジヤイは祈るとき、マー、マーと呼びかけて祈つた。それが一同の心を強く感動させた。

夕拝式が終了すると、やがて食事の用意ができた。綿の敷布とウールのカーペットが取り払われて、床には食事のために葉皿が並べられた。信者たち一同が席につき、タクール、聖ラーマクリシユナの席も用意された。そして、ベニー・パル氏が捧げた美味しいルチャやキチュリー、パバド、甘いもの、ヨーグルト、キールなど——みんな神前に供えたものを下げてきて——嬉しそうに喜んで召し上がった。

**大実母<sup>マ</sup>カーリーとブラフマン——完全智を得た後はこの二つは不<sup>おなじ</sup>異**

食事が終わると一同はキンマの葉を噛みながら、帰宅する準備をはじめた。発つ前に聖ラーマクリシユナは、ヴィジャイと二人きりで坐って話をしておられる。校長だけはその傍にいた。

〔ブラフマ協会と神の母性〕

聖ラーマクリシユナ「お前は、マ、マ、マと言って礼拝をしていたね。とてもいいことだよ。よく母親の方が父親より子供にとっては身近だと言うが、母親にはものをねだったりできて、父親に対してはそうはいかない。トライローキヤの母親の領地から沢山の金<sup>かね</sup>を荷車に積んで運んできた。赤ターバンを巻いた腕つぶしの強そうな男が何人も、棍棒を持って護衛していた。トライローキヤは何人かの仲間を連れて道ばたに立っていてね、無理矢理その金を全部とりあげてしまった。母親の持ち物に對しては、こんなふうに無理強いすることもできる。息子を裁判所に訴えることは、先ずしないものだ」

ヴィジャイ「ブラフマンが大実母<sup>マ</sup>だといいますと、では、形があるのでしょうか。それとも無相



なのでしようか?」

聖ラーマクリシユナ「ブラフマンである御方が大実母<sup>マ</sup>カーリー(アディヤシャクテイ)なんだよ。活動しないとき、あの御方をブラフマンと言う。創ったり、維持したり、壊したりするとき、あの御方をシャクテイと言うんだ。静止した水をブラフマンにたとえると、シャクテイまたはカーリーは動いて波立っている水だ。カーリーとは、つまりマハー・カーラ(ブラフマン)と交接する女性のことだ。カーリーは「一切相(諸相)にして無相」だ。お前がもし、神は無相だという信念をもっているなら、無相のカーリーを想っていないさ。一つの確信をもつてあの御方を想いつづけていれば、あの御方自らのご自分の本性をお前に教えて下さるよ。シャームブクルに着けば、いやでもテリバラがわかるだろう。(訳註——テリバラはシャームブクル村に隣接している)そのときは、ただ神は実在する、というだけではないんだよ。あの御方は、お前のところにきて話までして下さる——わたしがお前と話をしているようにね。信念を持つていけばすべては成就する。一つだけよく言っておくがね——お前が神は無相だという信念をもっているなら、しつかりその信念を持ちつづけていることだ。だが、じとりよがり独善的になつてはいけない。神について、神はこれこれで、決してそれ以外ではない。などとガンコになつてはだめだよ。そうじゃなく、『私としては神は無相であると信じていますが、その他にどんな相<sup>すがた</sup>をおとりにするか、それはあの御方だけが知っておられることで私にはわかりませんし、知りません』とでも言っていないさ。人間のホンのわずかな知性で、神の全貌<sup>すがた</sup>がわかると思ふかい? —シア(ニリットル)の壺には四シアの牛乳が入るかい? あの御方がお恵みを下さつて相<sup>すがた</sup>を見せて教えて下さったときに、はじめてわか

ることだ。それ以外はだめだ。

ブラフマンである御方こそシャクティなのだ——大実母<sup>ママ</sup>なんだ。

ブラサードは言う——

私は真理<sup>それ</sup>を母と慕う

その秘密を市場の真ん中で話せというのか

心よ、この暗示<sup>ヒント</sup>でわかつておくれ

ブラサード——ベンガルの詩人、ラームブラ  
サード

私はそれを真理とする。つまり、私はブラフマンの真理を知っている。その御方を、マー、マーと呼んでいるのだ、ということ。ブラサードは別の歌でこうも言っているよ——

カーリーとブラフマンがひとつと知って

ダ<sup>ダルマ</sup>と不正<sup>アダルマ</sup>のすべてを捨てた

不正<sup>アダルマ</sup>とは間違った（宗教で禁じられている）行為、正<sup>ダルマ</sup>とは宗教が命じている行為——施<sup>ほどこ</sup>しをしる、バラ

モンにサービスしろというような行為だ」

ヴィジャイ「正<sup>ダルマ</sup>と不正<sup>アダルマ</sup>を捨てますと、あとに何が残りますか？」

聖ラーマクリシュナ「純粋な信仰パウルマイ。わたしはマーにこう言ったものだ——『マー！ あんたの正ダルマをもつていけ、あんたの不正アドルマをもつていけ。そしてわたしに純粋な信仰をおくれ。このあんたの徳をもつていけ、あんたの罪をもつていけ。そしてわたしに純粋な信仰をおくれ。あんたの智識をもつていけ、あんたの無智をもつていけ。そしてわたしに純粋な信仰をおくれ』とね。わたしは智識さえ欲しがない。わたしは人望も名声も欲しくない。正ダルマと不正アドルマを放り投げると、純粋な信仰——汚れない、無私の、無条件の信仰——それだけが残るんだよ」

〔ブラフマ協会とヴェーダーンタのブラフマン——アディヤンヤクティ根元造化力〕

ブラフマ協会員「神と神の力シクティとは異つたものでございませうか？」

聖ラーマクリシュナ「完全フルナ・ジュニヤナ智を得てからは不異おなじだ。宝玉の輝きと宝玉のように同じものだ。宝玉の輝きを思えば必ず宝玉のことを思うだろう。牛乳と牛乳の白さのように同じものだ。一方を思えば、必ずもう一方を思わぬわけにはいかない。しかし、この不異の智慧は、完全な智識を得てからでなければわがものとはならない。完全智の三昧になると、二十四の宇宙原理から超越してしまふ——つまり、アハ我ハの意識がなくなるんだよ。サマディ三昧で何を感じたかは口では言えない。降りてくると、ヒントのようなものをほんのわずかだけ言える。三昧が解けてから、『オーム、オーム』と言うとき、わたしは百ハト(50メートル)も下に降りてきているんだよ。ブラフマンはヴェーダーの指標をはるか超越していて、言葉ではとても説明できるものではない。そこには、私アハも、お前マハもないんだ。

私とお前がある間——私は祈っている。私は瞑想している。という気持ちがある間は、お前——つまり、神が祈りをきいてくれる、という感じがある。神を人格として感じているわけだ。そういう場合は、こう思っているのがいい——『あなた(神)は主人、私は召使い』『あなたは全体、私はあなたの一部分』『あなたは実母、私は子供』この差異の感覚——私は一つのもの、あなたはまた別の一つ——この差異の感じはほかでもない、あの御方が感じさせて下さるんだよ。だから、男と女、光と闇、そのほかにたくさんの差異を感じるんだよ。この差異の感じがある間は、造化力(人格神)を認めなければならぬ。その御方が、わたしたちのなかに私という感じを置いて下さるんだよ。千遍も万遍も思い直し決心し直してみても、私という感じはなくなる。私意識がある間は、あの御方は人格神として現われる。

だから、私がある間は——つまり、差異感がある間は——ブラフマンが無相無性だといつても始まらない(言う資格がない)。その段階では、有相有性のブラフマンを認めなければならないんだよ。この有性ブラフマンを、ヴェエダやブラーナ、タントラではカーリーとかアディヤシャクティと言っているのだ」

ヴィジヤイ「そのアディヤシャクティを見ること、或いはブラフマン智を得ることは、どのような方法によって可能でありますか？」

聖ラーマクリシュナ「一生懸命にあの御方に祈れ。そして泣け！ そうすることで精神が清浄になっていく。澄んだ水には太陽の影がよく映る。信仰者の私という鏡に、その有性ブラフマンである

アデイヤシャクティが映って見えるんだよ。でも、その鏡はうんとキレイに拭かなければだめだ。ゴミや汚れがついていると、正しい映像を見ることはできない。

「私」という水で太陽を映して見るよりほか太陽を見る方法がない限り、また映像の太陽だけで真実の太陽を見る方法がない限り、その間は映像の太陽が十六アナ(100%)の真実なんだ。私<sup>カ</sup>がほんとはあると思っている間は、映像の太陽もほんとうにあるんだよ——十六アナの真実なんだよ。その映像の太陽が、つまりアデイヤシャクティなんだ。

もしブラフマン智を得たいなら、その映像をたどってほんものの太陽の方に行けばいい。その有性ブラフマンは、祈ればちゃんと聞きとどけて下さって、ブラフマン智を与えて下さるのだ。だって、有性ブラフマンが即ち、無性ブラフマンなんだから——。シャクティが即ち、ブラフマンなんだからね。完全智を得たら、この二つは不異だ。

大実母<sup>マ</sup>がブラフマン智も与えて下さるのだ。だが、純粋な信仰者はたいていの場合、ブラフマン智を欲しがらない。

また、もう一つの道——智識<sup>ジニヤース</sup>のヨーガ、これはとてつもなく難しい道だ。ブラフマ協会のお前たちは、<sup>ジニヤース</sup>智行者じゃなくて信仰者<sup>バクタク</sup>だよ！ 智識の道の行者はこういう信念をもっている——ブラフマンのみ真実在、この世界は錯覚、間違い、夢マボロシだ！ 私、<sup>おまえ</sup>相手、みんな夢だ！

〔敵意とブラフマ協会〕

「あの御方は、自分の奥深くに住む全智全能の主だよ！ 素直な心で、キレイな心であの御方に祈れ。あの御方は何でも教えて下さる。我執高慢を捨ててあの御方に頼りきれ。すべてを得られるさ。」

心よ、自らの内に住み

よそびとの家に行くなかれ

自らの奥をふかく探れば

求むるもの すべて得られん

無上の宝、賢者の玉は

望むもの すべて授けん

かぎりなき宝玉の山は

わが胸の奥にこそあれ

外で人と交わるときには、みんなに好意を持って同じ仲間のようになさい。悪意を持つてはいけないよ。あの人は人格神を認めていて、神は無相だという真理をわかろうともしない。あの人は無形の神は認めるが、人格神を認めようとはしない。あれはヒンドゥー教、あれはイスラム教、あれはクリスチャン——などと言って見下したりしちやいけない。あの御方がそんなふうに見せて下さ

るんだから——。みんなそれぞれ、生まれつき違った性質や傾向をもっているのだということを、よく会得してみんなと付き合いなさい。多くの人と交わって、そして、みんなを愛しなさい。それから自分の部屋に入って、静かな平安を楽しみなさい。智慧の明かりを内なる部屋に灯し、ブラフママイーのお顔を拝みなさい。自分の内なる部屋で、自己の本性を見るんだよ。

牛飼いが牛を野原に連れていくと、みんないっしょになって、まるで一かたまりになる。夕方、戻ると、またそれぞれの小屋に入れられる。自分の小屋で、自らのなかに住むのさ」

〔サンニヤーシンは貯えない——ベニー・パルの財物の善用〕

夜も十時を過ぎてから聖ラーマクリシュナは、南神村（ドズキヤシヨル）のカーリー寺にお帰りになるため、馬車に乗られた。一、二のお伴の信者がいっしょであった。深い闇のなかで、馬車は一本の樹の下に停まっていた。ベニー・パルはラームラルへのお土産に、ルチャや甘いものを馬車にのせようとして持ってきた。ベニー・パル「先生！ ラームラルが来られませんでしたので、食べ物を少し、お供の方々に持って行っていただきたいのですが——」

聖ラーマクリシュナ（不安げな様子で）お、ベニー・パルさん！ わたしといっしょに、そういうものに乗せないでくれ！ わたしにとつて障り（さわ）になるからね。どんなものでも、自分のそばに貯えて持つておくことはできないんだよ。だから気にしないでくれ」

ベニー・パル「よくわかりました。どうぞ私に、祝福を授けて下さいませ」

「聖ラーマクリシュナ「今日はほんとに嬉しかった。ね、財物アルタを召使いにする人が、ほんとの人間というものだよ。財物の使い方知らない人は、人間の姿をしても人間じゃない。人間の形をして、動物の振舞いをしているのさ！ あんたは徳を積んだね！ こんなに沢山の信者を喜ばせてくれて——」